


	学部長	学 長
閱 覧		

国 外 派 遣 研 究 員 報 告 書

令和 3 年 5 月 15 日

國學院大學学長 殿

所属・職名 文学部・准教授

氏 名 手塚 雄太 

令和 3 年度 国外派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1 派遣期間 (期間延長のある場合は含めて下さい)

令和 3 年 4 月 1 日 から 令和 4 年 3 月 31 日 まで

実際の出国日 3 年 4 月 24 日 同帰国日 4 年 4 月 1 日

2 受入先研究機関など

ルーヴェン・カトリック大学人文学部日文学科 (ベルギー)

3 研究目的

アーカイブズについて米英独仏の報告は多いが、他国についてはさほど知られていない。申請者は、近現代日本政治史とともに、アーカイブズ学の研究も行っているため、二つの専門を活かして他国の状況を調査する。

あわせて古くからの友好関係があり、戦前期には大規模な大使館も置かれたベルギーと日本との関係史を中心とした近現代日本関係史料に関する調査も行う。

4 派遣中の研究概要

前掲の研究計画を定めた2020年5月の段階では、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックがこれほど継続するとは思っておらず、派遣中にある程度終息することを前提に計画を練っていた。しかし、出国も欧州圏での感染爆発のため遅れたうえ、12月にはオミクロン株が蔓延するなど帰国までにコロナ禍は終息せず、気兼ねなく移動、とりわけ国境を越えた移動が可能だったのは、結果的に8月～11月、2月～3月の短期間に限られた。

4月末にベルギーへ到着した段階で、文書館は閉鎖もしくは閲覧制限が敷かれており、当初計画での研究遂行が困難になる可能性が想定された（文書館での調査はベルギー王立図書館・外交史料館で日本関係文書を閲覧するに留まった）。よって、入国してから目標を立て直した。そのおかげで、パンデミックに振り回されつつも、在外研究を充実したものにできた。

第一は、ヨーロッパにおける日本研究の現状の把握と課題の発見である。2021年は、1年延期されていたヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の研究集会がベルギー・ゲントで開催される予定であったほか、大学院生が中心となるEAJS PH.D ワークショップはルーヴェン大学が受け入れ校であった（いずれも3年に1度開催）。また、同大の教員・大学院生などの交流は、感染状況にかかわらず続けることができるだろうという目算もあった。

EAJS はオンラインとなってしまったが、欧州圏における日本研究の動向を把握できた。また、ルーヴェン大のヤン・シュミット教授の紹介で、欧州圏の日本研究者（アルザス欧州日本学研究所・元ボーフム大学教授のレギーネ・マティアス氏など）との交流もできた。

欧州圏における日本研究は、エキゾチシズムも交えた「ジャポノロジー」として展開していた。しかし、1970年代以降、研究の近代化が進み、「ジャポノロジー」が「ジャパニスタディーズ」へと変化し、現代は学問の現代化、精緻化の段階にある。また、日本研究の位置づけが、「グローバル・ヒストリー」を考えるうえでの素材という面を有していることもわかった。欧州中心の歴史叙述に対する批判があるなかで、それを相対化するために、日本を題材とした研究がなされるということである。

アメリカの日本研究者に日本語が読めない者がいるのに対して、欧州圏の研究者は日本における日本研究に精通し史料も読める。しかし、それでも日本の日本史研究に比べれば、一つ一つの研究の精緻さでは劣ることが多いという（その意味で、國學院大学が誇る精緻な実証的歴史研究が持つ意義は大きい）。しかし、欧州圏には欧州圏における研究史の文脈があり、日本人抜きで日本研究が成立している。そこではグローバル・ヒストリー、コロニアリズム、

ジェンダー、多国間関係など、日本における日本研究とは異なるテーマが好まれる傾向にある。研究の国際化には、単に「縦のものを横にする」のでは不十分であり、海外での研究史の文脈に適した形で精緻な日本史研究を展開していく必要があることがわかった。

第二は、欧州における博物館展示や史跡のあり方の把握である。手塚は博物館での勤務経験があり、学界でも元学芸員としての発言を期待されることもあり展示論の論文も執筆した。文書館での史料閲覧より、巡見はコロナ禍でも進めやすいという現実的理由もあった。

欧州圏の博物館展示において目立つのは個人への着目である。日本では個人情報の過度な制限があり、近現代史で「名もなき」個人を軸に据えるのが難しい。しかし、欧米圏では例えばホロコースト関係の博物館（ベルギー・カゼルネドシン、ドイツ・ダッハウ強制収容所など）でも、犠牲になった一人一人の詳しい説明がある。個人への着目は、移民と港湾を扱うベルギー・レッドスターライン博物館、ドイツ・シュタージ博物館などでも同様である。名無しの誰かではないことが展示に重みを加えている。また、日本の博物館では扱わない政治（ドイツ・ドイツ歴史博物館）、人権（ベルギー・カゼルネドシン）、人種・性（ドイツ・フランスの医療博物館）、軍事（各国の軍事博物館）など、論争的なテーマを正面に据えた展示も多かった。ドイツ鉄道博物館は駅で寝泊まりするホームレスまで展示の対象としていた。総じていって、日本の博物館展示は「無難」な展示ではある。しかし、「無難」を超えたところに、日本の近現代史展示のフロンティアがあるように思われた。

とはいえ、一方で、博物館は「国民国家」形成やナショナリズムの形成にも寄与する政治性を帯びた施設でもある。日本の博物館は文化施設として、社会教育・生涯学習施設としての側面が強く、意識されていないことが多いように思われるが、この点は海外の博物館において色濃い。ポーランドのワルシャワ蜂起博物館は修学旅行で来た子どもで賑わっている博物館だが、そこに展示されるのは祖国のため命を失った人々の活躍である。また、フランコ独裁政権の評価を巡り国内で対立のあるスペインの博物館では、展示は政治的対立と無縁ではいられない。日本の学芸員課程は、展示の「恐ろしさ」を教えているだろうか。「観光」の名の下で、歴史を題材に行う町おこしをもつ政治性をあらためて認識した。

このほか多数の戦争・軍事博物館や戦争遺跡からは国ごとの「戦争の記憶」の差異がよく理解できた。加えて興味深いことは、ベルギーのイーペル、フランスのダンケルクなど大陸ヨーロッパに点在する激戦地が、一次大戦後の墓参をきっかけに観光地化した点にある。観光や活用に舵を切り始めた日本の文化財・博物館行政を考えるうえでも有益な知見を得た。

5 その他の活動

滞在中はルーヴェン大学の学生を対象に英語による講演を行った。EAJS に参加する日本人研究者や、同時期にルーヴェン大に滞在した真辺将之早稲田大学教授（日本近現代史）の英語報告に刺激を受けて、人生初の英語報告に挑戦した。院生とはくずし字を読む勉強会も行った。また、欧州圏の都市を訪問するなかでは、日本の都市と異なる都市のあり方を体感した。得た知見の一部は、9月にオンラインで行われた渋谷学シンポジウムで紹介した。なお、日本で行われる学会・シンポジウム類がオンラインとなり、幸か不幸かベルギーからも参加が可能となったため、滞在中は上記を含め4度にわたり講演・報告を行った。このほか、外部査読誌の投稿論文1本、共同研究の論文集の論文1本、書評1本、中央公論新社より依頼されたウェブ記事1本を執筆した。

6 今後の研究計画

派遣研究で得た知見は、1つの論文として示しにくい。ただし、現在考えていることの1つは、手塚が進めてきた、朝鮮半島で植民地官僚として活躍し、そこで得た政治資源をもとに活動した政治家の研究の発展である。この研究は論じ方次第で海外の日本研究でも興味を集める可能性を秘めていると考えている。また、英語での講演を準備するなかで、選挙とジェンダーのような視点も得たので、これも今後の論文に取り入れるつもりである。歴史の叙述・記憶、戦争とツーリズムなど、当地で見いだした論点も、先々何らかの形でまとめたい。

7 感想・所感

パンデミックのなか、計画通りに進まなかった在外研究ではあったが、無事にかつ有意義に1年を過ごすことができた。これまで手塚は海外に長期滞在した経験がなかったため（海外旅行も2回目）、マイノリティとして異国に暮らすこと自体がよい経験となった。道ばたや建物に残るモニュメントから読み取れる歴史も興味深かった。海外での研究交流など、英語力がなく、ドメスティックな日本史研究者である手塚には無縁の世界であったが、この機会に国際学会への参加、英語での講演といった経験ができたのも収穫だった。派遣研究を機に、手塚を受け入れ教員として、ルーヴェン大の院生を本学の国際訪問研究員として10月から受け入れることになるなど、派遣前には考えたこともなかった新たな人的交流が始まっている。

在外研究で得た最大の成果は、研究者・教育者としてのより広い視野と人脈の獲得にあったように思っている。貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げる次第である。